

夕雲型と行く、深夜出 発 高速道路旅行

藤浜教徒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平成も終わりがけた晩秋の頃、三次元で艦これをするH提督はこう思った。

『三次元に艦娘が居て、一緒に旅行に行けたらなあ。』と。

そんな提督は、自分の妄想を纏めることにした。それがこの小説である。

始めに

藤浜教徒の私が、夕雲型と旅行行ったらこんな感じだろうなあ。と深夜テンションで一心不乱に書き綴ったものを投稿していくだけの小説です。

R18要素は一切ありませんが、深夜テンションで書いたもののため閲覧は自己責任で自由。誤字脱字がありましたらお気軽にコメント頂けると助かります。

諸注意

・深夜テンションで書いた為誤字脱字多いです。また、あくまで妄想なので「この娘はこんなキャラじゃない!」と思われる可能性もあります。それらがダメな方はブラウザバックして頂ければ幸いです。

・これはあくまで作者の「艦娘×現実」という妄想です。戦闘シーン等々もありません。それらを期待している方々もブラウザバックを推奨いたします。

・作者の夕雲型愛……いえ、妄想想像溢れるものとなります。ご了承下さい。

・キャラ崩壊あるかも……です。

目次

第一章・藤浜と行く、深夜出発高速道路旅行 i n 岩手	1
岩手	6
藤浜と行く、深夜出発高速道路旅行 i n 岩手	19

第一章・藤浜と行く、深夜出発高速道路旅行 i n 岩手 その壺

時刻は、草木も眠る深夜の丑三つ時

埼玉県西部地区の某町にある一軒家の駐車場から車が発進した。

その車は、ガソリンスタンドでの給油以外に寄り道もせず圏央道 桶川加納ICへ向かっていく。

車内の運転席にはI司令（仮名）が、後部座席には夕雲型駆逐艦の藤波と浜波の二人が居た。

藤波はあくびをしながら眠そうに、浜波は、藤波の方と運転している司令の方を交互に見ている。

この状況を説明するために、約3日前に話を戻そう。

—3日前—

執務室で書類の整理をしていた秘書艦兼嫁艦の藤波を、突然司令が呼んだ。

藤波「なに、司令、呼んだ？ 藤波、今忙しいんだけど。いまじやなきや…え？

浜ちんと…旅行…？ 岩手に？ 司令が運転してくれるの？ 本当…？ でもま

だ任務が……」

コンコン

???'「司令官、失礼します」

諦めているような藤波の声の後、執務室に早霜と飛龍、鳥海が、執務室の扉をノックをして入ってくる。

早霜「そこは問題ありません、藤波姉さん。旅行中の執務は私達夕雲型の姉妹と、二航戦のお二方、鳥海さんにお任せ下さい。」

飛龍「そうそう、鎮守府のことは私達に任せて、仲良く三人で出掛けてきなつて！」

藤波「早霜ちゃん、飛龍さん。本当に……いいの？」

鳥海「藤波さん、私も鎮守府も大丈夫だから。安心して、私たちの分まで楽しんできてね。」

藤波「鳥海さん……。藤波、皆の分まで楽しんできます。もち！ きつと……きつとです！」

藤波がそういったのを聞いた司令はホッと声を出すと、今度は浜波を執務室へ呼び出した。

早霜「司令官、では私はこれで……。」

飛龍「失礼しました〜！」

鳥海「司令官さん。私も失礼いたしますね。」

浜波が来る前に早霜飛龍鳥海は執務室を後にした。

三人が執務室から出た後、暫くして藤波と同じような指輪を指につけた浜波が入ってきた。

浜波も司令とケツコンしている嫁艦の一人である。

浜波「し、失礼……。します……。司令？ 急に呼び出して……。どっ、どしたの……？」

えつ……。ふーちゃんとりよ……。旅行？ わたし……。？ ふーちゃんとなら……。いつ、いいけど……。司令も居てくれるし……。 (小声) あ、あ、ご、ごめんなさい！ 何でもない、です。」

小声については聞こえなかったふりをした司令は、藤波、浜波両者ともからOKか再度確認してこう伝えた。

『明日の夕方、岩手へ行く。行くのが楽な自分の実家に行くので、旅行の準備をもう今日中にしておくこと。何を準備すればいいかはこのメモに書いてあるのでよく見なさい』
そう伝えた司令は、二人にメモを渡して自室に帰させた。

翌日

鎮守府の玄関まで見送りに来た蒼龍に「お土産期待してまーす！」と言われながら、手を水色・藤色のキャリーバッグを引きずりバッグを掛けた藤波と浜波は、鎮守府前に止

めてあった提督の車に乗り込み、鎮守府を後にした。

藤波によると、蒼龍には「期待しててくださいーい!!!」と彼女が言つて手を振り返しておいたらしい。

ここから提督の実家までは車でも約4時間かかる。見慣れない景色を見て目を輝かす藤波と浜波をバックミラーで見つつ、提督は安全運転で実家へと向かった。

提督の実家では、提督が藤浜に夕飯をご馳走したり、布団に寝かせただけなので割愛。

—話は今に戻り—

午前2時55分頃

司令が運転している藤浜を載せた車は、桶川加納ICに入り、白岡方面へ東進していた。

岩手へは、ここから久喜白岡JCTで東北道へ入った後、群馬、栃木、福島、宮城と北に500kmも行かなければならない。

菖蒲PAを通りすぎる頃に司令は二人にこの目的地が遥かな北の果てにある事実を告げ、さらにこう付け加える

「伝えた通り、まだまだ旅路は長い。二つ先のSAに休憩がてら寄るから、そこまで寝ていてもいい。着いたら起こしてやるから」

藤波の方は一瞬考えるしぐさを見せた後、「司令……いいの？　じゃあ藤波、寝るからね。おやすみ！」と喋って寝始めた。

一方浜波の方は、「ふ……ふーちゃん!? ……ん？　司令？　なっ、なに……？　寝なくて……大丈夫か、つて……？　あたしは別に……でも……、平気。平気、だから……。」と言って寝ないで外の景色を眺めていた。

しかし加須ICを過ぎる頃には、寝ている藤波の手を握って（後部座席で起きているのが浜波だけだったので、きつと心細かったのだろう。）、スヤスヤと寝始めた。

これは後方から来る車（この時間はトラックが多い）に気を付けようとバックミラーを見ていた提督が目撃していた。

内心、「藤浜尊いし可愛い」とか思っただけだが、口に出すと起こしてしまいそうだったので胸のうちに収め、運転に集中した。

次のSAは群馬との県境近くにある佐野SAである。

そして、いよいよ彼ら載せた車は、利根川に架かった橋を渡り、群馬へと入った（その武へ続く）

藤浜と行く、深夜出発高速道路旅行 in 岩手 その式

《北関東 那須の夜明け》

埼玉側から利根川を越えれば栃木県。北西部は山々がナナメ横に連なり、福島へと抜ける人々に試練を与える。

しかし、北東部や南部はうって変わって平野が広がる。

そのため、東北地方へ抜ける東北道は、南部から山々にぶつかり、沿うようにして福島へ走っているのだ。

司令と藤波浜波の3人を乗せた車は、そんな東北道の（利根川に架かる）利根川橋を渡り群馬へと入った。

相も変わらず浜波は藤波の手を握って寝ていて、藤波はそれに気づく様子もなく熟睡している。

館林ICを越えれば栃木県、そして佐野SAは目前である。

——ここで、佐野SAについて述べておこう——

佐野SAは栃木県南部の佐野市にある。埼玉県西部から東北へ向かうとほぼ最

初に寄れるSAであり、全国的にも珍しい上下を歩行者が行き来できることが特徴。このようなSAは、他にも関越道の高坂SAなどごく僅か。

また、上り線のSA内には宿泊施設もある（勿論泊まれる）。さらに、上り線の外には一般客も利用できる駐車場があり歩いて入ることもできる。

司令と藤浜が高速に入るために使った桶川加納ICからは43km、東北道の起点川口JCTからは78km。3人の高速道路往路終着点である岩手県盛岡ICまでは約450km以上もある。まだまだ旅は長い。

ちなみに、次のSAは餃子で有名な宇都宮市の上河内SAである。

——以上が佐野SAについてのたまかな概要だ 話を戻そう——

館林ICを通過したあたりで、司令は運転しながらバックミラーで後部座席の藤波浜波の様子を見ていた。

もうそろそろ到着する予定の佐野SAで、二人を起こすかどうか決めかねていたのである。

バックミラーに写っているのは熟睡していて起きる気配のない二人・・・。

そこで司令は決断した。「次のSAである上河内に寄ったときに起こそう」と。

しかし「自分のトイレ休憩のために佐野には寄る。まあ、お土産は帰りの上り線に止

めても上下往来できるから買えるからいいだろう。」と考えた司令はウインカーを出すと左車線に変更した。

既に看板には「佐野SA 2km」と書かれており、10分もかからないだろうと彼は考えていた

その考え通り、10分もしないうちに「P↑？」と書かれた入り口を示す看板が見えてきた。

彼は車のウインカーを左へ出しSAに入っていく。

時刻は午前3時28分

駐車場に車を止めた司令は、助手席に置いてあったクリップボードに挟んである（場所と予定到着、出発時刻が細かく書かれている）紙に、これまた掛けておいた黒ペンで『0328 佐野SA着 所要時間32分程』と書くと、「取りあえずは予定通りか」と小声で呟いた。

その後に、その中の佐野SAの予定出発時刻と、上河内の到着時刻の部分に線を引いた。

もともとは佐野で起こそうと思っていたが、熟睡していた二人を起こすのは悪いと思いい、予定を変更して上河内で起こすことになったからである。

クリップボードにペンを掛け直すと、ボードを助手席に置き、寝ている二人に、起こさないようにタオルケットをかけて車から出る。

11月とはいえ栃木の夜は肌寒かった。

司令は車を鍵をかけてトイレへ向かう。何故なら、このSAに寄った最大の目的はトイレ休憩であるから。

トイレを済ませた司令は、自販機コーナーに向かい、モカ(ブラックのホット)を買った。

これは、司令が深夜の高速を運転するときには必ず買うものである。何でも眠気覚ましなんだとか。

二人にも何か買っていこうと考えたが、まだ二人とも寝ていたのと、上河内で食べさせてあげたいものがあつたことを思い出して止めておいた。

買ったモカ ホットブラックを片手に、彼は車へと戻る。

相変わらず藤波浜波は寝ているようだ。

彼は、運転席へ再び乗り込むと、モカを飲み、車を発進させ本線へ車を戻した。

目指すは宇都宮の『上河内SA』である……といつても佐野からは53km、39分で着けるのだが。

司令は、後部座席で仲良く寝ている藤浜をバックミラーで見つつも、細心の注

意を払い車を走らせていく。

時刻はもう4時近いのだが、晩秋とあって日の出まではまだ2時間以上もある。

空はまだ暗く、闇夜の中で遠くに薄く見える山々の連なりも、空と山の間がどこか判別がつかない。

しかし、道路の方は照明が道路脇にあり、なおかつ車のライトもあるためそこまで暗いという訳ではない。

むしろオレンジ色の照明の光は暁の東北道を幻想的な霧囲気で包んでいた。

この霧囲気を好む人々は、深夜に高速道路をドライブがてらに走ることが多く、夜道の運転は十八番であることが多い。

この司令もその一人であるからにして、深夜の運転も相当手慣れている。

そんな運転手が細心の注意を払って運転している車は、特にトラブルもなく上河内SAへと到着した。

時刻は0416

なるべくSAのトイレに近い場所に車を止めると、先程と同じように到着時刻と佐野の出発時刻を書く。

その後、司令は寝ていた藤波を起こした。

藤波は、とろんと眠気の残った声で「ん…司令…なあに…？ 藤波、呼んだ…

？」と言いながら上方向に体と手を伸ばそうとした。

そこで藤波は、浜ちゃんが自分の手を握って幸せそうに寝ているのに気づく。

眠そうだった藤波は狼狽し、顔を真っ赤にして言葉に詰まってしまった。なんとか言葉の口から出した藤波は

「： 浜ちゃん???' 藤波の寝てる間に何やってるの???'と、未だに気持ち良さそうに藤波の手を握って寝ている浜波に対して言ったのだが、小声でなおかつ恥ずかしすぎて途中で

噛みまくっていたから浜波には聞こえなかったようだ。

そんな光景を司令が見て穏やかに笑ってるのに対して当の本人はものすごく恥ずかしいらしく「ツツツツツツ／／／／／ 司令ツ!!! 見ないでツ!!! 何でって：：： そんなのどうでもいいからあ!!!!／／／／／／／／／／／とキレたり（照れたり）してるなか、浜波が眠そうな顔で起きる!

顔が赤くなってる藤波を見ると、寝起きの声で「あ、ふーちゃん：：：。顔赤いけど：：：大丈夫?：：。調子悪いの：？」と話しかける。

藤波は何か言おうとしたが再び言葉に詰まり、恥ずかしさのあまり「：：。浜ちゃんのせいでよ：：。／／／／（顔真っ赤）」と言ってしまふ。

いきなりそんな事を言われた浜波の方は「え：：： 私!?!」と困惑して、藤波を見つめ始める。

それもそのはず、浜波が藤波の手を握って寝てたことを、当の本人が覚えてないからである。

藤波の方も、浜波が意識して自分の手を握って寝てたと思ひ込んでいたので「えっ……!？」と驚き、顔の赤みも少し落ち着いてきた（しかし依然として顔は赤い）

少し落ち着いたタイムミングを見計らって、司令が「とりあえず降りようか。あそこにトイレがあるから、早く済ませてお土産買うぞ。あ、外は寒いから上着を着ていくように。」と言って自らも白色の上着を着て車を降りた。

浜波は周りが見たことない景色で怖いのか、降りるのを躊躇していた。それを見た藤波は先に降りて、真っ赤になりながらも浜波の手を自分から掴む。

藤波「浜ちゃん、一緒に行こっ!! / / /」

藤波に手を掴んでもらった浜波は手を繋ぐように藤波の手を掴むと

「ふーちゃん……! うん、平気……。ありがっ、とう……。うん、ふーちゃんもいるから……うん、安心して。私は……。もう、大丈夫。」と言いながら車を降りた。

藤波「浜ちゃん、大丈夫。藤波は、いつも浜ちゃんと一緒だからね……! もう、浜ちゃんを悲しませたりしないから……!! ……さ、早く行こっ! 司令は時間だけには厳しいんだから!」

浜波「ふーちゃん……。うん……。!」

藤波と浜波が仲良く手を繋いでトイレへ行くのをSAの入り口近くで見っていた司令は「まるで双子だなあ。」と思いつつ、用事を済ませるためにSAの中へ入っていった。

トイレを済ませた二人はトイレの前で司令と合流した。

司令は何やらビニール袋を手持っていたが、二人とも特に気にはしなかった。(中に「とちおとめまん 一個160円」が3個入っていることは秘密)

司令「お待たせ。さ、お土産を買おうか！ ここ以外にも買えるところはあるから買いますよ…。？」

藤波「もち！ 浜ちゃん、お土産一緒に買いに行くよね？ 32駆の最初のお土産任務、行くぞっ！」

そう言うと藤波は、嬉しそうに軽くスキップしてSAの建物へ入っていった。

浜波「ふーちゃん、待つて…。先に行かないで…。さっ、三十二駆、はっ、浜波、お土産任務いきます…。で、出ます…!!」

浜波も藤波を追うようにSAの建物へ入っていく。

そして最後に司令が「あの二人は元気でいいねえ。でも迷子になりそうだししっかり見ておかないと。」と呟きながら入っていった

——SA売店内ショッピングコーナー——

藤波と浜波はSA売店内のショッピングコーナーで、長波や早霜へのお土産を選んで

いた。

藤波「色々なお土産があるねえ。．．． あ、あのお菓子美味しそう。お土産を選ぶのは楽しいね。ね、浜ちゃん！」

浜波「あ、うん。．．． ふーちゃんは何か買うの。．．． え、『御用邸の月』。．．． ? それ。．．． い、かも。．．． ?」

藤波「浜ちゃんも一緒に長波姉たちのために買ってこつか。」

浜波「うん、そうする。」

そこへ司令がやってくる。

司令「藤波浜波、お土産は決まったかい？」

藤波と浜波は『御用邸の月（6個入り）』を一つずつ持って司令の呼び掛けに答える

藤波「あつ、司令。藤波たち、御用邸の月を買うことにした。もち、いいよね？」

浜波「あの。．． 司令。．．。これ、一箱885円。．．。」

一箱885円と聞いて少し悩んだ司令だったが、10秒ほど考えた後、「二箱で1770円か。他ならぬ藤波の頼みだ、買ってあげよう。」と言った。

これを聞いた二人は、顔を見合わせた後、とても嬉しそうに喜んだ。

藤波を脇に連れて、御用邸の月（2箱）と、二人の飲み物（藤波はQ.O.Oすつきり白

ぶどう、浜波はなっちゃんアップル)をレジへ持っていき、提督が自腹で買った。

(この小説の中ではQ.O.O白ぶどうは高速道路のSAかマックでのみ販売されているという設定)

二人に買ったお土産は袋に入れて持たせて、飲み物はバッグに入れさせると司令は二人とともに車へと戻った。

司令は運転席へ乗り込み、藤浜が後部座席でシートベルトを締めたのを確認すると、手に持っていた袋から「とちおとめマン」を二つ出すと、「藤波と浜波で一つずつだ。食べたい時に食べていい。」と言った。

それを見てようやく藤波が気づく。司令は私たちがトイレに行っている間にこれを買ってくれていたのだ、と。

二人は今すぐにも食べたい気持ちを我慢して、司令にお礼を言った。

藤波「…え?これ、藤波たちに?うわ、美味しそう。本当に…いいの?そっか。じゃあ、ありがたく、貰っとくね。もち!」

浜波「司令? これを… わたしに…?あつ、ありがつ…と…」

二人にとちおとめまんを渡すと、「後ろにあるタオルケットは寒くなったら使っていないから。」と言うと自身も袋からとちおとめまんを取り出し口に加える。

その後エンジンをかけ、車を発進させた。

藤波浜波も、貰ったとちおとめまんを食べ始めた。

藤波は普通に食べて、浜波は一口含み、味を点検するかのようにつくりと食べていた。

このとちおとめまんは、心地の良いイチゴの甘さが特徴で、幾つも欲しくなるような美味しさのまんである。

食べてるものを自然に笑顔にする……（かもです！）

時刻は0458、もう朝の5時である。

日の出まではあと1時間弱。

北関東 那須の夜明けは刻々と近づいていた。

次のSAは51km先の「那須高原SA」。上河内からは約44分、那須塩原市にあるSAである。

しかし、下りで買えるものの大半は上りで買えてしまうため、お土産を買うのなら溶けやすいものも買える帰りがいいだろう。

この司令はそう考えていた。そのため、運転しながら後ろの二人に「次のSAではあくまでトイレ休憩だけ。ここで買えるものはほぼ全て帰りに買えるからね。着いたら、トイレ休憩だけ済ませて車に戻るよ。」と伝えた。

帰りで買えると聞いたからか、それともとちおとめまんが美味しいからか分からないが、不服そうな表情は見られず、二人とも笑顔で了承した。

真つ正面や真横に那須・日光の山々を見ながら車は北東へ進む。

矢板や西那須野、黒磯を通過し、段々と明るくなってきた0549頃（日の出の24分前）に那須高原SAへと着いた。

前述した通り、お土産は帰りでも帰るということでトイレ休憩だけ（+ある特別な用事）である。

タオルケットを足に掛けていた（藤波が遠慮している浜波にもかけてあげた。タオルケットの色も藤浜を意識した水色と藤色だったりする。）藤浜は、かけていたそれを座席の上に置くと司令と共に車を降りて、車の鍵を閉める司令を置いて先にトイレへ向かった。

司令の方は、ここである娘の到着を待っていた。

すると、後方から近づいてくる足音が一つ。

彼がゆっくりと振り返るとそこには、段々と明るくなっていく曙の空を横目に、到着を待っていた娘の姿が：：

???「司令官、大変お待たせしたかも。○○、本日の観光ガイドを務めさせて頂きます。宜しくお願い致しますかも：：です！」

その参へ続く・・・

藤浜と行く、深夜出発高速道路旅行 in 岩手 その参

—白河の関、そしてみちのくへ—

0549 那須高原SA

H司令は、二人と載ってきた車の前である艦娘の到着を待つていた。

すると、後方から急ぎ足で近づいてくる足音が一つ。その足音は夕雲型艦娘のブーツの音だった。

彼が振り返るとそこには、段々と明るくなっていく那須地方の曙の空の下、きつちりとした制服を着こなし、夕雲型姉妹愛用のブーツを姉妹同様に履いた夕雲型駆逐艦「高波」がいた。

高波「司令官、大変お待たせしたかも。高波、今回の岩手旅行の観光ガイドを務めさせて頂きます。宜しくお願い致しますかも…です！」

実は高波は、その愛くるしさと真面目さを買われて定期的に東北地方の観光ガイドを務めていた。（あくまでH司令の鎮守府での話）

普段はツアーの添乗員としてバスガイドをしているのだが、今回は司令たちに付き添う形で専属のガイド役を自ら買って出たのだ。

そして、司令はこのことを藤浜に伝えていない、(ある意味)彼女たちへのサプライズである。

トイレから戻ってきた藤波浜波の二人は、鎮守府でいつも見ている艦娘(しかも姉)の姿を見て思わず二度見した。

藤波「た……高波姉!?! どうしてここに!?!」

浜波「たつ…… たつちゃん……? こんなところで……ど、どしたの……? え、観光…… ガイ、ド?」

高波「はい。高波、今回の旅行で観光ガイドを務めさせて頂くことになったかも、です! 藤波ちゃん、浜波ちゃん。突然だったかと思いますが、宜しくお願いしますかも。」

そんな突然の観光ガイド(高波)が助手席に乗り、一行は那須高原SAを発った。

そして、いよいよ東北地方の玄関口である白河の関があつた福島県白河市へ入るのである。

車の後部座席に座っている藤波浜波が、「突然の観光ガイドが高波姉だったなんて、驚いたねえ」と話をしていると、高波が二人の方を振り返った。

高波「藤波ちゃん、浜波ちゃん。もうそろそろ目的地の岩手県がある東北地方かもです。そして、今私達の通っている場所は、白河の関があつた福島県の白河市かもです。」

藤波「白河の関……?」

高波「はい。白河の関は、今いる福島県白河市にあった、山形の鼠ヶ関（ねずがせき）、福島県の勿来関（なこそそのせき）とともに、奥州三関の一つに数えられる関所かも。江戸、今の帝都東京から陸奥国、今の東北地方太平洋側に通じる東山道、その要衝に設けられた関門として史上名高いかも、です！

：：： また、能因法師が「都をば 霞とともに 立ちしかど 秋風ぞ吹く 白河の関（都を春霞が立つところに旅立つたが、もう秋風が吹いている、この白河の関では。）」と呼んだことでも有名で、他にも数多くの俳句や歌枕がここで生み出されてきた。：：：： そんなツウには有名な場所かも。」

自分が知らなかった未知の事を聞かされた藤波は興味津々のようで、高波の話の聞いて目を輝かせていた。

藤波「さすが高波姉。！ 観光ガイド務めてるだけあるねえ。藤波、ちよつと興味湧いてきたかも。：：。」

高波「藤波ちゃん、ありがとう。東北はこんな面白いところがいっぱいあるかもです！ 今回の旅で色々紹介しますです！」

一方の浜波は興味があるというよりも、わざわざ自分達のために解説をしてくれたことにお礼が言いたかったようだ。

浜波「たつちゃん。：： わざわざ。：： ありがとう、とう。：：。 うん、ふーちゃんと。：： 楽し

みにしてるから…！」

高波「浜波ちゃん… ありがとうかも！ まだまだ目的地の岩手県は遠いから、飽きないように色々と紹介していくかも、です！」

（ちなみに、白河市の外れには「阿武隈」というPAが存在する。このPAの案内看板を見て、藤波が阿武隈に「福島には阿武隈っていう地名と名前のPAがあるんだって！」というメールを送ったのはまた別のお話。）

添乗員高波が、今居る場所の紹介等を藤浜にしつつ、司令は車を運転させて福島県を北上していく。

須賀川、鏡石、郡山、本宮、そして安達太良山の麓にある安達太良SAへと到着した。遥か遠くに見える安達太良山や東吾妻山にはもう既に雪が積もっている。

藤浜の二人が車の窓から絶景を見て興奮しているのを横目に、司令はSAの駐車場に車を停める。

先に降りた藤浜の二人に続き、司令と高波が降りる。

藤波「うう… やっぱ…。 藤波、ちよつと寒いかも。」

高波「司令官、お疲れ様でした。藤波ちゃん、浜波ちゃん、東北道最大規模の駐車場を有し福島の真ん中にあるSA、安達太良SAに到着かもです。」

浜波「あだ… あだだ、ら…？」

耳慣れない言葉を聞いて困惑する浜波。

そんな浜波を見て、寒さで震えながら藤波がスマホで調べ始めた。

藤波「……うん。浜ちゃん、安達太良だよ！えーっと、福島県中部にある活火山で……日本百名山にも指定されていて温泉やスキー場があったり、高山植物が生えてたりして……いてとつてもすごい山みたい。」

藤波の説明に高波が付け加える。

高波「藤波ちゃん、その通りかもです！……ここはそんな安達太良山の麓にあるSAかも。雄大な景色の安達太良山を一望できたり、地元の伊達鶏料理を食べたり出来るSAかもです。」

それを聞いた浜波の口角が僅かに上がる。

浜波「伊達鶏……美味しそう。食べたい、です……。」

浜波がボソツと呟いた。

それを聞いた司令は「じゃあ、私の奢りで朝食がてらに食べるかい？」と訊いた。

彼女は（前髪から僅かに見える）目を輝かせて、司令の方を見た。

藤波も司令を見て、「本当に……？」というような疑い半分期待半分の顔をしている。

司令は財布を出しながら「ああ、勿論。君たちが喜んでくれるなら。」とに向かっていった。

二人は芯から嬉しそうな顔をして司令の後ろについていった。そんな三人の後方で朝日射すSAの駐車場の騒音の一つに、スマホのコール音が加わる。

高波は羽織っていたジャケットの内ポケットから、スマホを取り出すと、電話に出た。

高波「あ、姉さま。高波かもです。こんな朝早くからどうしたかもですか？ あつ、

はい。了解かも。高波にお任せ下さい。」

姉からの電話を切ると、急いでSAの建物に入っていった。

——安達太良SA内 食事処「あだたら亭」にて——

藤波「わあつ…… いい匂い！司令、浜ちゃん、すごいねえ！」

SAの中の見慣れない光景に藤波は興奮を隠せないようだった。

一方、浜波はというと……

浜波「ふーちゃん…… 興奮しすぎ……。あつ、司令……。えつと、私達は、ど、ここに……

座れば、いい……。ですか？」

どうすればいいのかわからないようでもオドオドしていた。

司令はそんな二人を見て「はあ……」とため息をつくど、二人にカウンター近くの空席

へ座るように指示した。

二人が席に座ったのを見て券売機へ向かう。

そして券売機で食券を買おうと、お店のスタッフに「伊達鶏五目わっぱセット（温）と安達太良ラーメンを一つずつお願いします」と注文した。

スタッフさんは威勢のいい声で「ありがとうございます！少々お待ちください！」と言うとお店の厨房へと向かっていった。

司令はそれを見届けると、二人の座った席の反対側に腰かけた。

藤波浜波は二人で仲良く喋っていたが、注文を終えた司令に藤波がいち早く気付く。

藤波「あつ、司令！藤波たちのためにありがとう。ほら、浜ちゃんもお礼言お、ねっ！」

浜波「し、司令。：。あつ。：。ありが。：。：。つと。：。」

司令も「いいいいいいよ、他ならぬ君たちの頼みだからね。」と笑った。